

# 世界展開力強化事業 長期留学 第2回報告書

(メキシコ合衆国チャピngo自治大学)

2017年12月31日

東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科4年 岡田哲也

渡航後四ヶ月が経過した現在の生活・学習状況を以下の通り報告する。

## ◎生活・授業

全体としては、10月10日に移民局で無事に在留カードを発行してもらうことができ法的な認可が降りたことで滞在に不安を抱えることなく過ごしている。またこちらの生活にもかなり慣れ、授業や自身の卒論調査計画、家事や学内外のイベントなどとのバランスを無理なく取り、良い具合で留学生活が送れていると感じている。気候面では10月28日にサマータイムが終わり日本との時差は一時間広がった。気温も日々低下し、空気の乾燥と朝晩の寒さが目立つ。しかし日中は今だに20℃を超えることも多く、寒暖差で体調を崩さないよう注意している。12月初旬に結膜炎に罹ったことと、時折食べ合わせによって胃腸が荒れること以外は概ね問題なく健康を維持している。生活費については交友関係がさらに広がり多少出費がかさむこともあるが、調査による外泊や食費などを差し引いても計画した予算を超過することはまだなく、日本学生支援機構から支給されている奨学金のありがたみを感じる人が多い。

授業は継続的に出席することでリスニング力は確実に向上し、農業関連の専門用語も同時に効率よく学ぶことができている。前報告時から多少授業内容に変更を加え、11月以降は以下の日程で生活していた。先住民族(ナワ族)居住地域に赴いた際に、ナワトル語が少し話せるだけでも仲を深めるコミュニケーションツールとして効果的に機能することを感じ、その学習により一層力を入れている。

- ・月曜⇒La clase de Náhuatl (15:00-16:30)
- ・火曜⇒Sociología Rural (8:00-9:30) (部活20:00-22:00)
- ・水曜⇒Taller de desarrollo rural (11:00-14:00) La clase de Náhuatl (15:00-16:30)
- ・木曜⇒Sociología Rural (8:00-9:30,17:30-19:00) (部活20:00-22:00)
- ・金曜⇒La clase de Náhuatl (15:30-16:30)
- ・土日⇒休日

ちょうど現在は冬季休業中であるが、後学期(1月22日～)からは学科間の制約が少ない留学生の立場を上手く利用して、他学科特に農業環境学科(Agroecología)が開講している授業のいくつかを、正規在籍の農村社会学科の授業と並行して受けることを考えている。朝8時前から夜8時頃まで、ほぼ休みなく授業で埋め尽くされた毎日を送る現地の学生に刺激を受けたことにもよる。

## ◎調査・フィールドワーク

この3ヶ月間(10月～12月)のうちに行った土地やその内容について簡易的ではあるが報告する。10月27日にSan Telmo Tepetlaoxtocという近隣の農村部に学科の研修旅行で赴き、リュウゼツラン(メキシコではマゲイと呼ばれる)の畑で実習をした。多肉植物で乾燥に強いマゲイは天水環境

下でもよく育つが、10年以上経ったものなどはとても大きいため広い空間が必要。植物的特性はもちろん、花、葉、花茎、樹液の利用のされ方や先住民族にとっての重要性、昔と今の栽培状況の違いなど様々な話を伺い、小さな株を他の農地に移植するために掘り起こす作業もした。

チャピngo自治大学で普段は日本語クラスを持っている穂積拓夫先生の付き添いで、プエブラ州のTlatlauquitepec(12/3)、トラスカラ州のEspañita(12/11)、イダルゴ州のMixquiahuala(12/12)の農村部にそれぞれ日帰りで訪れ、バイオダイジェスターの普及活動の見学と補助を行った。家畜の糞尿由来のバイオマスエネルギーなので環境にも優しく循環可能で、炊事に使用することでガス代を抑え且つ薪などの伐採・運搬などの労働も節約することができる。また残渣を有機肥料として畑に利用することもでき、便益が多い優秀なエネルギーであることを改めて学んだ。大学から出る補助金を主な活動資源にしているらしく、ダイジェスターの構造やそうしたサポートも相まってかなり経済的な値段で設置することができる。家畜をそれなりの頭数所有していると言っても貧しい農民が多く、初期投資と耐用年数など考えると非常に住民の生活向上に役立っているようだった。現地の住民組織や別の地域団体と協力してプログラムの推進・ダイジェスターの設置を行っており、より普及を広めるために時折プレゼンテーションなども開催している。乾季に入り気温が下がっている地域が多く、生産に太陽光の影響を受けやすいバイオガスに関する農民の不安や疑問の声を多く聞いたが、丁寧な説明で理解を促す先生の姿が印象的であった。

個人的には卒論の調査地候補の一つである、同じテスココ市内にあるサン・ヘロニモ・アマナルコ(San Jerónimo Amanalco)という標高2700mに位置する都市にも数回(10/14,10/29,11/25)訪れた。テスココ中心部からは20kmほど離れており、片道約100円の乗合バスで30~40分の距離である。メキシコ州の中でも数少ない先住民族割合が高い地域であり、山の麓にあるため斜面が多く比較的寒い。土地はほとんどが畑か放牧地で、地元住民への聞き込みによるとトウモロコシ・数種のインゲンマメ・コムギ・リンゴ・モモ・ナシ・プラムなどを栽培し、家畜はウシ・ブタ・ヒツジ・ヤギ・ロバ・ウマを飼育しているらしい。宗教はカトリックだが町に面する山はトラロック(Tlaloc・4120m)という、アステカ文明時代から続く雨の神を祀る信仰の山であり、諸教混交の状況に興味を持った。またこの地域は川や泉といった豊富な水資源が存在し、道には土地の高低に影響を受けること無く大小様々な水路が張り巡らされていて、乾季にも関わらずそのほぼ全てにたっぷり水が流れていた。山中に大きく豊かな泉があり、さらに低地に位置する別の大きな地域全体にまで水を通してということだったので、かなり豊富な水量があると思われる。

もう一つはプエブラ州の北部山脈に位置するチコンクアウトラ(Chiconcuautla)という地方自治体で、テスココからメキシコシティまでバスで行き、そのバスターミナルから一番近い都市のサカトラン(Zacatlán)まで大型バスで約4~5時間、そこからさらに地元の乗合バスに乗って2時間という距離である。死者の日という祭日に合わせて10月31日~11月3日まで滞在した。現在は地元の先住民族家庭に住み込みで生活している最中である(12/17-1/11)。国内で最もナワ族人口が多いプエブラ州だが、この地域はベラクルス州とイダルゴ州に挟まれていることもあり、オトミ(Otomí)やトトナコ(Totonaco)などの他民族との関わりも非常に強い。年間を通して雨が降り湿度も高い亜熱帯性の気候である。年間平均気温は18°C以上で、初めて訪問した時も非常に暑かった。土地利用はトウモロコシ・インゲンマメ・コーヒー・アボカド・トウガラシ・トマト・モモ・オレンジ・バナナ・ハヤトウリ・テホコテなどが栽培され、家畜はウマやヤギなども見かけたが、ブタ・ヒツジ・トリが主に飼育されている。チコンクアウトラは人口に対する先住民族割合が約

84%と高いことに加えて、国内の人間開発指数が最も低い125市町村の一つに挙げられている。州内の217市町村の中でも7番目に貧困人口が高く(91.07%)、その貧困と地域孤立性の度合いに強い興味を惹かれる地域である。

## ◎出来事

### ●フェリア

10月5~15日まで、キャンパスのはずれの方でferia nacional de la cultura ruralというメキシコ国内の地域文化をテーマにした祭りが開催されていた。かなり大規模なもので、学内外から多くの人々が来場し、連日賑わっていた。少し値は張るが国内ほぼ全ての州の土産物屋や飲食店が揃っていて、見て回るだけでも楽しめる。また、伝統的な衣装に身を包んだ男女が巧みに馬を操るイベントも印象的だった。

### ●旧車の展示

10月21,22日にcentro cultural mexiquense bicentenarioという大学近くの文化センターで、数十年以上前に製造されたクラシックカーやヒストリックカーの展示会があった。普段から町中で古い車が走っているのをよく見かけるが、綺麗に整備され映画に出てくるくらいの存在感を放つ車の数々には興奮した。100台以上あったが現在も全て現役で、持ち主が普通に運転して帰路についていた。

### ●観光

Zaclán de las manzanasという、魔法のように魅惑的な観光地(pueblo mágico)として政府に登録されている都市に数泊した。歴史的な町並みが残され、またスペイン統治時代の影響から一大産地として発展したリング製品は有名で、美味しかった。ハロウィーンの時期だったので仮装して練り歩く人々の姿が多く、チーズパンの祭りも開催されていた。

### ●語学センターでの各国フェア

11月17日にpasillo cultural del centro de idiomaというイベントが学内の語学センター裏の敷地で開催され、日本ブースの手伝いも兼ねて参加した。英語、フランス語、ドイツ語など、様々な言語のブースがその言語を学習している学生たちによって作られ、文化紹介とともに飲食の販売もしていた。ステージでは歌や踊り、寸劇なども披露され、またOGの日本人の方々にもお会いすることが出来た。

### ●国立人類学博物館

メキシコシティにある、メキシコ古代文明の集大成とも言うべき国立人類学博物館に行った。国内各地に点在する遺跡の内、保存すべき重要な壁画や石像などが全てこの博物館に集められている。一階の考古学フロアと二階の民族学フロアに分かれている上にそれぞれ12室もあったので、全て見て回るのに何時間も掛かった。有名なアステカ・カレンダーは、直径3.6mの石版の大きさと細かく複雑なモチーフが非常に神秘的であった。

### ●アメリカンフットボールの試合観戦

12月9日に学内の競技場で、学生の中から選抜されたナショナルチームによるアメリカンフットボールの試合が行われた。ヨーロッパの複数国連合チームと、アメリカ代表との2試合が催され、観戦した。白熱した戦いは、ホームの応援のおかげかメキシコチームが両試合とも勝利した。タックルをかいくぐってタッチダウンを決める姿には目を奪われた。

## ◎最後に

留学生活も四ヶ月が過ぎ、慣れてきた部分も多いが、何かを期待して待っている受けの姿勢ではより大きな学びに繋がらないということも感じる。今まで以上に語学を始め勉学に集中し、後期か

らの授業そして卒論調査を、自らの意思や行動力によって充実したものとしていきたい。慣れに安住しないよう、常に変化を意識して今後の留学生活に取り組みたい。

